

演題3. ヒト顎下腺由来上皮性細胞株(HSG)のヌードマウスへの移植

○島山 節子, 金子 良司, 武田 泰典
佐藤 方信, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

1981年, 白砂は放射線照射を受けた54歳男性の顎下腺から介在部導管上皮由来の細胞株を樹立してHSG株として報告したが, 現在, HSG株の有する性状とその有用性に関する研究は充分とはいえない。今回私たちはHSG株のヌードマウスへの移植を試み, 単層培養系とヌードマウス生体内培養系における微細形態および唾液腺導管上皮の機能的マーカーに関する免疫組織化学的検索を行った。〈方法〉培養法は10%非動化仔牛血清を添加したMEM培地を用い, 5%CO₂+95% airで行った。BALB/cを遺伝的背景に持つ生後6週の雄性ヌードマウス(5匹)の背部皮下に 1×10^7 cells/mlの細胞懸濁液0.1mlを注入した。移植後2週目に既に腫瘍を形成していた1匹を屠殺し, 残りの4匹を1ヶ月目に屠殺した。摘出腫瘍は10%中性ホルマリンおよび2%グルタルアルデヒドで固定し, それぞれ通常の方法にて光顕および電顕標本を作成した。免疫組織化学的染色は酵素抗体間接法で行った。機能的マーカーとしてリゾチーム, ラクトフェリン, secretoty component を選び1次抗体として, それぞれについてDAKO社製の抗血清(ウサギ)を用いた。〈結果とまとめ〉1) 単層培養下のHSG株は, 多角形の均一な細胞形態を呈し索状増殖しながらdish上に拡がった。パパニコロウ染色にて角化細胞はごく稀にしか認めなかった。機能的マーカーはいずれも陰性であった。2) HSG株は移植した5匹のヌードマウスすべてに生着し腫瘍を形成した。3) ヌードマウス移植腫瘍の組織所見は同一で, 腫瘍細胞は腺腔状に配列し, intercellular canalを形成し, 低分化型の腺癌と考えられた。単層培養下におけるよりもヌードマウス生体内培養下の方がcell organellaが豊富で代謝活性が高く, 細胞本来の組織構築が発現したと考えられた。しかし機能的マーカーの発現はみられなかった。

演題4. 予診新患登録による最近9年間の外来患者の動向

○小川 光一, 石井 由美子, 戸塚 盛雄

岩手医科大学歯学部歯科予診室

本学歯学部附属病院において以前から患者の減少が問題になっている。今回われわれは, 患者数の変動を分析するため昭和50年1月より58年12月までの予診新患登録者を対象に, 性・年代・地域・診療科別について患者数の推移を検討したので報告した。

予診新患登録者数は, 昭和50年が6752人で52年5435人まで減少し, 以後, 病院工事のため57年のみ4812人まで減少した以外は一定数を保ち, 総受診患者数の60~70%ではほぼ平行して変動していた。登録患者の男女比は女1に対して男0.71~0.86で女性が多く, 年代別では男女とも10歳未満の増加と10歳以上50歳未満の減少を認めた。各月の1日平均登録患者数の季節変動は3月, 1月と7~8月に患者数のピークがみられた。診療科別では, 保存科(修復・歯内)は50年が2068人で57年の817人まで激減し58年1028人まで回復し, 口腔外科は50年が2084人で同じパターンで減少しているが58年の1871人程に止まっていた。補綴科は50年の969人から同じパターンで減少し57年が464人で58年702人まで急増していた。歯周科は50年652人から漸減しており, 矯正科は50年485人から漸増していた。小児歯科は50年の259人から53年47人まで減少し, 以後急増し56年より700人程を維持していた。さらに地域別に歯科診療所数と登録患者数を検討すると, 市内および盛岡保健所管内では歯科診療所の急増により本学歯学部受診患者数の著しい減少を認めたが, 歯科診療所の漸増している県南では逆に本学受診患者の増加を認め, 県東部沿岸および県北も多少本学受診患者の増加を認めた。しかし, この増加は小児歯科および矯正科の患者および紹介患者の増加と推定された。実際, 登録患者ではこれらの増加により一般患者の割合は50年の73.4%から58年の38.2%まで減少していた。これらの事実をふまえて教育機関として本学附属病院の対応がなされていく必要があると思われる。

演題5. スケーラーの歯周ポケット内到達度と操作性—とくにグレーシーキュレットについて

○鎌田 英史, 菅野 健, 松木 健二,
石川 和史, 渡辺 好郎, 高山 透,
中林 良行, 菅原 教修

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

ポケット内のスクレーピングとルートプレーニングを完全に行うためには、ポケットが再現性をもって客観的に評価し得ることが必須条件である。現在、これらの見地から、測定圧を一定にした荷重プローベの考案や、刃先に改良を加えたスクレーラーの開発がなされている。しかし、これら種々の器具を用いた場合のポケット内到達度に関する検索は少ない。

今回、我々はこれらプローベおよびスクレーラーのポケット内到達度について、従来の器具によるものとの比較を試みたので報告する。

ポケットプローベについては、従来の通常丸型のもとの、最近市販されている25g荷重丸型の2種を、またスクレーラーについては、従来のキュレット、および超音波と、近年用いられることの多くなったグレースー4種、および形態の異なるシクルとキュレット2種の計9種を採用した。

検索は歯周疾患により抜去が必要と診断された症例の5歯、および便宜抜去と診断された症例の1歯の唇・頬側中央部と近遠心部の計18部位について行なった。2名の検索者により、通常および荷重のプローベでポケットを測定した後、種々スクレーラーで到達度を肉眼的およびX線的に測定した。また、測定後、当該歯を抜去し、メチレンブルーで染色し、ポケットの実測値との比較を試みた。

その結果、プローベでは、便宜抜去の健全歯部を除いて、荷重プローベの方が通常プローベよりもポケットは一般に高い数値を示しており、荷重プローベでは、実測値よりも高い数値を示す例もみられた。しかし、これらの平均値について、統計学的には有意差は得られなかった。また、スクレーラーについては、殆どの器具とも、ポケット底部に近い所まで到達しているのが確認されたが、中でもスクレーラーの刃先が他よりも細い形態の異なる2種で到達度は優れていた。荷重プローベがポケット実測値よりも高い値を示すのは、病変の進んだ部位では、加圧により、ポケット底部が根尖側に押し下げられることによると思われた。また、超音波スクレーラーも、手用スクレーラーと同程度に到達することが判明した。

演題6. 歯牙と係わりあると思われた術後性上顎嚢胞の症例について

○藤原 秀世, 横田 光正, 宮沢 政義,
大屋 高德, 藤岡 幸雄, 坂巻 公男*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座*

今回、私どもは昭和51年から58年の8年間における当科の術後性上顎嚢胞と診断された146症例中、歯牙と係わりあると思われた術後性上顎嚢胞の症例について検討したので報告した。

その発生因子には従来より種々あげられるが、私どもは臨床所見、X線所見、ならびに手術時所見より、洞底部に多くの肉芽形成が認められたタイプの32症例と歯根尖が損傷されたタイプの9症例、計41症例について検索しえた。

タイプⅠは洞底部肉芽形成型で、すなわち上顎洞炎根治術時に歯根尖と洞底部が近接しているため、歯槽窩が破壊され歯髓壊死から同部に歯性炎症が生じたり、また洞底部が複雑な症例では特に洞粘膜の一部残存が生じ、これより炎症性の肉芽形成を促進させたのではないかと考える。一方、タイプⅡは歯根尖損傷型で、歯根尖と尖底部が近接しているため、これが損傷され歯髓壊死から歯性炎症が根尖部に波及したもので、嚢胞の発生因子と考えられる症例である。

上顎洞炎根治術後、洞内は対孔部に向い骨性に充塞されていくとされているが、その術後の治癒機転において、洞底部に残留した洞粘膜や根尖部の歯性炎症が長期にわたる嚢胞の発生に関与すると推測される。

1981年、朝倉は術後性上顎嚢胞と歯牙との関係について3つのグループに分類しており、上顎洞根治術時に歯牙と関係ある症例では、歯牙処置を施さないと歯性炎症をくり返し、そこに嚢胞が生じると報告している。

以上のことにより、上顎洞炎根治術時に、歯牙と係わりある症例では、歯牙歯髓処置も同時に行なう必要があることが強く示唆された。

演題7. 陳旧性下顎骨々折の観血的整復術の1治験例

○大屋 高德, 伊藤 信明, 工藤 啓吾,
藤岡 幸雄, 清野 和夫* 石橋 寛二*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座*